

# SEEDS



No.231 夏号  
2016 /



活動レポート  
生まれ変わった知床自然センター

自然特集  
知床のコウモリ

特集

新理事長インタビュー  
村田良介

スタッフの本棚 第21回  
イヌイットの壁掛け

知床財団購買部  
知床の手ぬぐい

ココだけのはなし 第2回  
素敵ないいわけ



## 生まれ変わった知床自然センター

文 - 秋葉圭太 公園事業係長

**4**月20日に知床自然センターはリニューアルオープンしました。開館以来、はじめての全面改装です。

自然センターが変わらなければならなかった理由はいくつかあります。開館から28年、約四半世紀の歳月は、人や施設を変えるのに十分な時間です。まずは老朽化。開館当時の若手スタッフは五十肩に悩み、「近代的な」鉄筋コンクリート製の施設は嵐の度に屋根が剥がれ、雨漏りが止まりません。そして社会の変化。遺産登録を経て、周辺のビクター施設も充実しました。それから、観光客の国際化や団体ツアー利用から個人利用へのシフトも顕著です。

また、自然センターの入館者数はこの10年著しい減少傾向が続いています。開館当時の目玉だった大型映像展示「ダイナビジョン」も映像更新の検討が必要、との指摘の音が続いていました。



リニューアルオープン前日  
メインパネルの前にて

### 懲りずに提案してきた結果、今がある

当然、私たちも手をこまねいていたわけではありません。繰り返して自然センターのあり方や魅力アップの方法、施設の改修について議論し、町とも協議を続けてきました。世界遺産登録が一段落した2007年には、具体的構想として、映像館やトイレ、エントランスなどの改修案が提案され、2010年には園地全体を対象とした将来構想イメージマップが示されました。

また、2013、2014年にはホロベツ地区の利用のあり方を検討する社会実験も実施され、自然センターの機能やサービスのあり方を示すことができました。これらの検討は、施設単体を対象としたものから、ホロベツ地区の全体構想を経て、国立公園のよりよい利用のあり方や将来ビジョンへと波紋のように広がっていきました。

このように考えると、今回のリニューアルは、単なる改修工事でも老朽化対策でもありません。これまでの検討を踏まえ、施設改修に併せた機能やサービスのあり方を再構築することが最も重要なポイントです。



### リニューアルのコンセプト

リニューアルが決定し、私たちは新たな自然センターのコンセプトとそれに基づいた実施計画をとりまとめる作業を始めました。とりまとめたセンターの機能設計書は「マニフェスト」と名付けられ、2013年から続く検討メンバーを中心としたリニューアルチームが、その実行にあたりました。

新しい自然センターのコンセプトは「フィールドを知り、楽しむための国際ビクターセンター」とし、公園内でのレクリエーションの起点となる「拠点機能」と居心地の良い空間の提供による「滞留機能」の充実を重点的な目標としました。

何度も行われた打ち合わせ。コンセントの位置から棚の選別まですべてスタッフで話し合いました。



チームは、「展示」「レクチャー」「インフォメーション」「販売・レンタル」「映像館」「広報・イベント」などの担当にわかれ、「マニフェスト」に掲げた目標を具体化するにとしました。



リニューアルのための「マニフェスト」



企画展示室



レクチャーコーナー



広々としたインフォメーションカウンター



新大型映像「小さな世界はワンダーランド」



知床半島のメインパネル



エントランスのガラス展示

### ここが変わりました！

#### エントランスとメインパネル

エントランスは、「変わった！」ことが一目でわかる、わくわく感に溢れたイメージ作りを大切にしました。「フィールドを知り、楽しむ」コンセプトを表現するために、エントランスのガラス面や館内中央のメイン展示は、知床の海や山とそれを楽しむ人をイメージしたイラストで飾りました。いづれも地元在住のイラストレーター稲葉可奈氏による作品です。



メインパネルのマップ上の動植物やアクティビティのマグネットも見どころです

#### インフォメーション

スペースが広がったインフォメーションカウンターでは、様々な情報提供機能に加え、レンタル品の貸し出しや普及販売コーナーも備えています。また、夏期にはシャトルバス乗り換え等のサービスカウンターとしても機能します。

### 映像ホール

定番のオリジナル映像「四季・知床」に英語・中国語の字幕が加わり国際化に対応。また、上映機材のデジタル化により、複数の作品を上映することができるようになりました。今年度は、特別上映プログラムとしてBBC earth制作のシマリスを主人公にしたドキュメンタリー作品「小さな世界はワンダーランド」の上映を行っています。



「捨てずにいつまでも思い出と一緒にっておいてもらえるようなチケットを」とチケットのデザインも一新！

#### レクチャーコーナー

レクチャーコーナーは、フレペの滝遊歩道への出発口にあります。最大40名ほどが収容できるスペースでは、ヒグマの活動状況や安全

### 展示

**大瀬昇さん寄贈のシマフクロウ**

展示スペースには、開館当初当財団の初代事務局長を務めた大瀬昇さんの作品「シマフクロウ」の張り子が展示されています。このシマフクロウは竹と和紙で出来ていて、紐を引っ張ると、羽が動く仕組みになっています。ご自宅に大事に保管されていたものを、今回のリニューアルオープンに伴い寄贈いただきました。この場をお借りし、改めて御礼申し上げます。



実物大のシマフクロウの張り子

対策を伝える「日刊知床ヒグマ情報」や旬の自然情報を伝える「知床財団スタッフトーク！」などの定時プログラムを1日4回実施しています。

#### フードコート&ショップ

館内左手は、ゆっくりとくつろいだり休憩したりするスペースとなっており、フードコートとお土産を販売するショップがあります。運営は引き続き株式会社ユートピア知床が担当しています。ランチメニューもリニューアル！地場産食材をふんだんに使用したワンプレートランチが好評です。



リニューアルを期に一新されたフードコートのメニュー。地場産食材を使ったワンプレートはスタッフにも人気！

### これから

スペースが大きく広がり、常設展示では、周辺の散策エリアを紹介する「フィールド展示」に加え、知床の自然や動物を紹介する展示を館内各所に設置しています。人気の柱展示も継続しているほか、館内中央には、企画展示室が新設されました。現在、「知られざる海の鳥たち」展を開催中です。

知床自然センターの原点は、斜里町が策定した「知床国立公園幌別地区基本構想（1983）」にさかのぼります。通称「トピア計画」と呼ばれるこの構想は、国立公園の入口にあたるホロベツ地区を公園利用の拠点とし、そこから先を完全シャトルバス利用にすることで、原生的な自然を守ると同時に、

知床らしい特別な体験を提供するという明確な考えに裏打ちされた挑戦的な構想です。ホロベツ地区

には、シャトルバス乗り換えのための駐車場やビジターセンターの設置にとどまらず、公園管理の拠点となる施設やその実行部隊としての管理組織の設置が提言されています。こうした提言により、知床自然センターと知床財団（当時は自然トピアしれとこ管理財団）が設置されたのです。自然センターと知床財団はいわば、共通の出自を持つ双子の兄弟として28年間の年月を歩んできたといえるかもしれません。

今回の取り組みは、自然センターの施設改修を中心としたホロベツ地区のリニューアル第一弾です。これを契機に、園地周辺の整備やしれとこ100m運動地の公開など私たちの取り組みは続きます。そしてこれは、先人の取り組みと構想の延長線上に位置しています。施設と組織を次世代に繋ぐための具体的な取り組みが、今回のリニューアル作業だったのだと思います。